

<論 説>

「スペインの興隆」を支えた商人たち

—カトリック両王の時代（1474 - 1516）を中心に—

飯 田 敏 彦

はじめに

1. 15世紀におけるカスティーリャ経済の「興隆」
 - 1.1. 15世紀カスティーリャの経済とブルゴス貿易商組合
 - 1.1.1. 15世紀における領主経済の繁栄
 - 1.1.2. ブルゴス貿易商組合
 - 1.2. カトリック両王の時代におけるブルゴス商人の商取引網の拡大
 - 1.2.1. ムルシア地方へのブルゴス商人の進出
 - 1.2.2. フィレンツェ、リスボンなどへのブルゴス商人の進出
 2. 北欧の商業都市におけるカスティーリャ人の商人
 - 2.1. カスティーリャ人の在外居留民団
 - 2.2. プリュージュの居留民団の発展
 - 2.3. アントウェルペンの居留民団
 - 2.4. アントウェルペンを拠点とするアロ兄弟の活動
- おわりに

はじめに

19世紀以来、スペインの経済的な後進性と貧困が注目され、また強調されるようになった。そして、スペイン人については怠惰とか傲慢といったイメージが定着した。スペイン人には商売のための才能とか資質が欠けており、近代的な産業経営には不向きであるという偏見がヨーロッパ中に広まったのである。このためであろうか、「スペインの興隆」についての研究が「衰退」の研究よりもおろそかにされてきた嫌いがある。たしかに、スペインが経済的に興隆した15世紀末から16世紀前半を見ても、多数の外国人がスペインに定住して経済活動を行っており、特に南部ではジェノヴァ人の優勢が疑いのない状態

であった。だが、エリオットが指摘しているように、16世紀前半のカスティーリャ北部の都市においては、カスティーリャ人の商人と金融業者が、カスティーリャの経済生活に重要な地位を占めており、彼らは事業の機会を利用することには、なんのためらいも示さなかったのである。その代表的な都市はカスティーリャ北部のブルゴスであり、エリオットはブルゴスについてマルエングダ家、サラマンカ家、ミランダ家のような有力な商人の支配する町であると述べている。これらの商人たちは羊毛貿易で財をなし、いわゆる「スペインの興隆」(＝カスティーリャの興隆)に貢献したのである。カスティーリャ人の商人にとってはネーデルラントとの貿易が15世紀半ばからとくに重要であり、16世紀半ばになると、カスティーリャの輸出貿易のほぼ半分はネーデルラント向けであった。こうした外国貿易上の利害を反映して、15世紀末にスペインの王室は、フランドル、ブラバントなどを支配するハプスブルク家寄りの外交政策を推進し、1496年にハプスブルク家のフェリーペ美公にフアナ王女を嫁がせ、翌1497年に同じハプスブルク家のマルガレーテ王女をファン王子の妃に迎えた。また同じ頃に、王室はブルゴス貿易商組合とブリュージュにおけるカスティーリャ人の居留民団を軸とする貿易システムを整備・強化し、ラロッシュェル、ロンドン、フィレンツェに「在外商館」(factoría)を設けて海外におけるカスティーリャ人の商業活動を支援している。こうして、カスティーリャ人の商人は北欧各地で他の国々の商人と肩をならべて活躍したのであるが、彼らの活動については、わが国ではこれまで十分に紹介されていない。そこで本稿においては、カトリック両王の時代(1474～1516年)を中心に、「スペインの興隆」を支えたカスティーリャ商人たちの商業活動の一端を明らかにしたい。まず、15世紀のカスティーリャ経済を概観したのちに、カスティーリャ北部とネーデルラントの間の商業において重要な役割を演じたブルゴス商人が、両王の時代にどのように商取引網を広げたのかを説明する。次いで、カルレ女史、カサード・アロンソなどの研究に基づいて、15世紀からブリュージュで発展したカスティーリャ人の居留民団について明らかにした上で、両王の時代にアントウェルペンを拠点とする商業と金融業において活躍し

たアロ兄弟の活動を垣間見ることにする。

- i Henry Kamen, "The Decline of Spain: A Historical Myth?", *Past & Present*, No. 81, 1978. を参照。
- ii J. H. エリオット (藤田一成訳) 『スペイン帝国の興亡』岩波書店, 1982年, 第3章および第5章。
- iii Joseph Pérez, *Isabel y Fernando. Los Reyes Católicos*, Madrid, 1988, pp. 295–297.
- iv Luis Suárez Fernández y Juan de Mata Carriazo: 《La España de los Reyes Católicos (1474–1516)》, en: Ramón Menéndez Pidal (ed.), *Historia de España*, Tomo XVII, Madrid, 1983, pp. 66–67.
- v María del Carmen Carlé: 《Mercaderes en Castilla》, *Cuadernos de Historia de España*, vols. XXI–XXII, 1954, pp. 146–328, Hilario Casado Alonso: 《Las colonias de mercaderes castellanos en Europa (siglos XIV–XVI)》, en: *Castilla y Europa: comercio y mercaderes en los siglos XIV, XV y XVI*, Burgos, 1995, pp. 15–56.

1. 15世紀におけるカスティーリャ経済の「興隆」

1.1. 15世紀カスティーリャの経済とブルゴス貿易商組合

1.1.1. 15世紀における領主経済の繁栄

15世紀半ばのカスティーリャの人口は420万人、同世紀末には450～500万人ほどと推定されている。そのカスティーリャにおいて、15世紀初めに国土を南北に移動する羊の数は100万頭であったが、羊群の規模は1477年までには269万頭、1526年には300万頭に増加した。15世紀を通じて、この移動牧羊業がカスティーリャで急速に成長し、特に国の南部では広大な土地が冬季に羊群の放牧地にあてられたのである。エストレマドゥーラ地方と南の騎士修道会領では、各都市の市参事会が牧草地に適用していた規制が撤廃され、また羊群の所有者と市参事会との交渉で決まっていた入牧料について王権が介入するようになるなど、移動牧羊業の発展が促された。15世紀半ば以降の急速な人口成長の時期に、牧羊業が穀物生産を圧迫したことはよく知られている。15世紀末に土地の3分の2は牧草地となっていたのである。羊毛の刈り取りは、羊群が南の牧草地からもどって夏をすごすカスティーリャ北部の牧草地で行わ

れた。その後ブルゴスなどに集められた羊毛は、カンタブリア地方のサンタンデルやビスカヤ地方のビルバオなどの港からバスクの商船で北欧に輸出された。ⁱ

15世紀後半にカスティーリャはイギリスに代わる原毛輸出国として「ヨーロッパの世界経済」の松舞台に登場した。ここから考えられるのは、15世紀のカスティーリャでは、羊毛生産と羊毛輸出を軸とする経済・社会システムが構築されたのではないかということである。15世紀末までに、こうしたシステムが実際に築かれたのであるが、ここにおいて最大の受益者は、聖俗の貴族を中心とする大牧羊業者、ブルゴスなど内陸部の都市の羊毛商人および王権であった。15世紀半ばからカスティーリャでは貴族層が繁栄したが、牧羊業から利益をあげ、また王室財産に寄生する新たな貴族がこのときに台頭していたのである。スニガ家（ベハル公爵）、アルバレス・デ・トレド家（アルバ公爵）、パチェコ家（ビリエーナ侯爵）などがその代表例である。特にパチェコ家の所領は、15世紀末にカスティーリャ西部のクエンカから南のアルメリアに延び、その面積は25,000 km²（王国の総面積の7%余）、領民数は15万人、年収は10万ドゥカードに及んだ。ⁱⁱ

15世紀以降のカスティーリャでは、メスタ（移動牧羊業者組合）が権勢をふるった。15世紀には、カスティーリャの有力貴族たちがその代表者であるエントレガドル（entregador）職に就いていた。このことは、大貴族がメスタの重要な構成員になっていたことを示唆している。特にエンリケ4世（在位1454～1474年）の寵臣として知られるアルバロ・デ・ルナの一族であるカリージョ・デ・アクーニャ家のメンバーがメスタの代表を務めたことが特筆に値する。15世紀後半にこの要職にあったペドロ・デ・アクーニャはブエンディア伯爵であった。ⁱⁱⁱ

他方で、サンティアゴ、カラトラバおよびアルカンタラという3大騎士修道会も牧羊業から多大な利益をあげていた。3大騎士修道会領は、王国の総面積の10%（35,000 km²）に及び、特にサンティアゴ騎士修道会は強大であった。サンティアゴの騎士修道会の総長職は多額の収入を在職者にもたらした。

歴代の総長は政治的にも権勢をほしいままにした人物ばかりであり、15世紀初めのフェルナンド・デ・アンテケラ王子（のちのアラゴン王フェルナンド1世）に続いて、その息子のエンリケ王子、アルバロ・デ・ルナ、ベルトゥラン・デ・ラ・クエバ、そしてピリエーナ侯がこの顯職にあった。1499年には王室がこの騎士修道会領の管理権を獲得している^{iv}。

こうした貴族階層の栄華を根底で支えたのは領主制の強化である。15世紀のカスティーリャでは、エンコミエンダ制（委託領地）の原型と言われるベエトゥリア制（*behetría*）が消滅し、領主制が強化された。ベエトゥリア制の下では、村落は特定領主の保護下におかれるが、村落は領主を選択する権利を保持していた。だが、15世紀に領主は村落の権利を奪うことに成功して村落への支配を強めた。また、大貴族は大半の王領地で裁判権を握り、都市への「侵入」を開始した。1442年にコルテス（議会）は200人以上の領民を抱える領主が都市内に邸宅を構えるのを禁じるよう、また都市で裁判権を行使しないよう国王に請願したが、無駄であった^v。

しかしながら、羊毛という工業用原料の輸出に特化していた15世紀のカスティーリャでも、国内の毛織物工業を振興しようとする動きがあった。1438年にマドリガルのコルテスは羊毛輸出と毛織物輸入の規制を求めた。一時、税収が減ることがあっても、国内の毛織物生産の拡大と毛織物輸出の開始がいずれその穴を埋めると主張し、イギリスの成功例に学ぼうとする人々が15世紀のコルテスにはいたのである。また、1462年にエンリケ4世は羊毛生産量の3分の1を国内の毛織物生産のために確保するよう命じた。この勅令は守られなかったようだが、カトリック両王の時代まで、勅令の施行と遵守を求める声はやまなかった。ところが、同じ1462年にエンリケ4世は貨幣改革を行い、その際に王国内で販売されている各種商品の最高額を改定した。この最高額の改定表を見ると、フィレンツェのえんじ染め錦織やピロード、ホラント、フランドルおよびブルターニュの麻織物、フランドルやルーアンの毛織物などが並んでおり、これらの製品輸入がいわば既成事実化していたことがわかる。カスティーリャでは、手工業者を保護しようとする動きは非常に弱かったのであ

vi
る。

1.1.2. ブルゴス貿易商組合

15世紀に築かれた羊毛生産と羊毛輸出を基軸とする経済システムにおいて、ブルゴス商人は羊毛輸出の主な担い手であった。1455年に彼らが組織したブルゴス貿易商組合は1494年に王室から商事裁判権を与えられた。組合はまた、フランドル、イギリスおよびフランス向けの羊毛輸出を許可し、羊毛輸出に必要な商船をカスティーリャ北部の港で用立てる特権を得ていた。16世紀初めに、約150人のブルゴス商人が1,500~3,000人の季節労働者をやとって羊毛を袋に詰め、7・8月に北部の港に向けて輸送していた。15世紀後半に1万2,000~1万5,000袋(約1,270~1,590トン)、16世紀前半に2万5,000~5万袋(約2,650~5,300トン)の羊毛を組合は指定市場であるブリュージュに輸出した。15世紀末からカスティーリャ産のメリノ種羊毛は、品質の上でイギリス産羊毛を上回るようになり、海外でこれに対する需要が高まったのである。^{vii}

カスティーリャ人が海外各地で形成していた居留民団は、それぞれがまったく独立していたわけではなく、すべての居留民団の上には、調整役を務めたブルゴスの組合があった。1494年にブルゴスの組合の特権と組織が拡大されたが、これには外地の代理商に対するブルゴス商人の監督を強化する目的もあった。一方、在外居留民団の代表者である領事も、代理商の取引や帳簿を監視した。^{viii}そればかりか、ブリュージュ、アントウェルペン、ラロッシュェル、ナント、ロンドンおよびフィレンツェの領事は、ブルゴスの組合の長老と領事に対して詳細な業務報告と決算報告を行う義務を負った。外地の領事は、新たな支出項目を設けたり税金を導入する際にはブルゴスの組合の了承を事前に受けねばならなかったし、収支決算後の余剰金をブルゴスに送金しなければならなかった。^{ix}

16世紀に組合は、毎年3月と10月にビルバオ、サントデル、ラレドなどの港で20—25隻からなる船団を編成して羊毛をフランドルに運んだ。^xこの引き換えとして彼らは毛織物や麻織物などの工業製品をフランドル、イギリス、

フランスからカスティーリャに輸入した。彼らはカスティーリャ北部からの輸出を独占するに止まらず、輸出品の市場に進出して現地で輸入・販売を取り仕切っていた。例えば、アンダルシアにおけるオリーブ油の生産と取引はブルゴスの組合によって調整され統制^{xi}されていた。上記のように、彼らは外地からの製品輸入もさかんに行ったが、これには、輸出振興よりも製品輸入の確保を重視するカスティーリャの伝統的な経済政策が影響している。彼らは工業製品を輸入する義務を負っていたのである。

1.2. カトリック両王の時代におけるブルゴス商人の商取引網の拡大

1.2.1. ムルシア地方へのブルゴス商人の進出

15世紀末にブルゴス商人が目指したところは、北のフランドルやイギリスから南のイタリアまで商取引網を広げることであった。実際に彼らの商取引網は15世紀後半に拡大しつつあった。これを反映して、バスクの商船は、この世紀末に西地中海の航路から姿を消したのである。バスク人は、1450年から1465年に西地中海に乗りだしてジェノヴァ人などのイタリア商人の商品を運んでいたが、以後、カスティーリャの北部地方、南のバレンシア、カディス、マラガ、カナリア諸島などの発展途上の取引に参加するようになった。ところで、ブルゴス商人はイベリア半島の南部ではジェノヴァ人と競争を繰り広げねばならなかったが、半島の南部とイタリアとの間の貿易を支配することはできなかった。ブルゴス商人は、新大陸貿易にも参加したが、16世紀半ばまでにジェノヴァ人に圧倒され、セビーリャと新大陸植民地との単なる取次業者となる者が多かった。

ブルゴス商人がカスティーリャ南部に進出したのは15世紀後半になってからである。ロドリゲス・リョピスの研究によると、1470—80年頃には、ブルゴス商人は内陸部のトレドもしくはアンダルシア地方に定住したイタリア人とともに、トレドから地中海沿岸のムルシア地方に至る商業ルート、いわゆる「カスティーリャ街道」をさかん^{xi}に往来するようになっていた。さらに1492年にグラナダが征服されてから、カスティーリャ内陸部の羊群がムルシア地方沿

海部の牧草地を訪れるようになり、この地方の経済が発展し始めると、カステイーリャ北部の商人はひんぱんにムルシア市の外港であるカルタヘナ港を利用するようになった。その後も、1503年に王権がカルタヘナ近辺のピリエーナ侯爵領を支配下におさめたこと、またカルタヘナに近いマサロン港で明礬生産とその輸出が本格化したことが彼らの進出を促した。

一方、この地方の中心都市であるムルシア市では早くも14世紀末に商人団体が成立していたが、商人の大半はジェノヴァ人であった。15世紀になると、ムルシアは羊毛と皮革を輸出し、高級織物と織物染料の大青を輸入していたのであり、ジェノヴァ人はこの大青の供給に関する独占権を軸に商業を展開していた。1390年代から1460—70年まで、彼らは大青の輸入を独占した。ジェノヴァ人は、これにしばしば穀物の輸出入と市参事会への貸し付けを組み合わせ^{xii}合わせていた。

こうしたなか、1490年にカトリック両王は、ブルゴスの商人であるディエゴ・デ・ソリアにカルタヘナ司教の収入を差し押さえるよう命じており、ソリアは彼の同郷のペドロ・デ・マルエンダとフェルナンド・デ・カストロにこの仕事を委任している。これがブルゴス商人進出の機縁になったようで、この頃からブルゴス商人の名がカルタヘナの史料にひんぱんに現われる。早くもこの前年の1489年にエルナンド・デ・コバルビアスとフアン・ヒメネス・デ・エスパーニャが上質羊毛をイタリアに輸出しており、1490年に前述のディエゴ・デ・ソリアとアルバロ・デ・レルマも上質羊毛をイタリアに輸出した^{xiii}。彼らはカルタヘナからは上質の羊毛をイタリアに輸出し、後述するようにマサロンからは明礬をイギリスとフランドルに輸出する一方で、高級織物の輸入をさかんに行うようになった^{xiv}。

ところで、ムルシア地方のジェノヴァ人はトスカナとロンバルディアの両地方から大青を独占的に輸入していた。彼らが輸入した大青の51.8%はムルシアで使われ、残りはトレド、クエンカなどの内陸部の市場に運ばれた。ところが1480年代になると、ブルゴス商人がトレド・カルタヘナのルートに進出してツールーズの大青をムルシア地方に供給するようになり、ジェノヴァ人の独

占は崩れた。しかも 16 世紀前半に、このツールーズの大青がムルシアの市場では優勢だったのである。16 世紀半ばまでに、カスティーリャ北部のアビラ出身のベルヌイ家が大量輸入の主な担い手になっていた。大量だけでなく、1480 年代にブルゴス商人は、織物輸入にも積極的であった。1502 年に 15 人のブルゴス商人が船を調達して織物をムルシアに輸入し、内陸部に送った。その評価額は 650 万マラベディ（1 万 7,333 ドゥカード）^{xv}であった。

他方で、ムルシア地方で採掘された明礬は、1480 年代にはフランドルに輸出されていた。明礬の生産・販売はジェノヴァ人が独占していたが、ブルゴス商人は明礬をムルシアから北欧に運んで市場の開拓に貢献していた。例えば 1488 年には、ペドロ・デ・カストロがジェノヴァ人のアグスティン・イタリアンから 2,000 アローバ（23,000 kg）の明礬をマサロンで買い取っている。1515 年にもペドロ・デ・カストロとアンドレス・デ・ペスケラが明礬をフランドルに運んでいる。こうしたブルゴス商人の取引は 1530 年代まで続いたと考えられる。1542 年からはジェノヴァのグリマルディ家がフランドルで明礬の輸入を独占したのである。^{xvi}

それでは、15 世紀末から 16 世紀初めのカルタヘナにおける貿易額の動きを見てみよう。カルタヘナにおけるブルゴス商人の取引総額をアルモハリファスゴ（輸入関税）の納税額から推計すると、1496 年の 1,250 万マラベディ（3,333 ドゥカード）から 1502 年の 650 万マラベディ（1,733 ドゥカード）の間で推移していることがわかる。これとは別に、15 世紀にカルタヘナの教会が徴収した同市のアルモハリファスゴ税の税収は、1420 年代から 15 世紀半ばまで 2 万マラベディで変わらなかったが、1490 年代には 10 万 3,750 マラベディに増えている。カルタヘナに輸入された商品の多くがトレドなどの内陸部の都市に運ばれていたことから、この頃にトレド - カルタヘナのルートを通じて行われるカスティーリャの貿易が拡大したことは間違いない。1502 年にブルゴス商人のなかで最大の輸入額を記録しているのは、アロンソ・デ・レルマで、彼はディエゴ・デ・ソリアの娘婿であった。なお、1502 年のアルモハリファスゴ税の納税額を納税者の国籍別に見ると、イタリア人（定着したジェノ

ヴァ人の取引は含まれていない)が全体の61.1%を占めており、これに対してブルゴス商人は23.08%で、イタリア人の優位は揺るぎのないものであった。^{xvi}

1.2.2. フィレンツェ、リスボンなどへのブルゴス商人の進出

15世紀末にブルゴス商人はイサベル女王の後押しを受けてイタリアへの進出に努めていた。星野秀利氏によれば、1480年代から、フィレンツェではスペイン(カスティーリャ)産の羊毛が毛織物の原料として使われるようになったが、カスティーリャ人による高級羊毛の供給は1490年代に始まったようだ。彼らによる羊毛供給は、1494年にカトリック両王がフィレンツェに在外商館を設置してから急速に拡大し、16世紀の最初の10年間に、その羊毛供給量はフィレンツェやジェノヴァの商人の供給量をはるかに上回っていた。フィレンツェの毛織物製造会社の帳簿には、サラマンカ家、カストロ家、クエバス家、マルエンダ家といったブルゴスの有力商家のメンバーが名前を残している。またカルレ女史によると、フィレンツェでは、スアレス・デ・ラコンチャ家、マスエロ家、アストゥディーリョ家、ラモネダ家、カストロ家などが盛んに取引を行った。1490年代に、ブルゴス商人は王権の支援を受けながら商取引網をフィレンツェにのばしていたのである。そして1508年には、2隻のギプスコアの船が、ブルゴス商人の羊毛とえんじ粉をフィレンツェに運んだ。16世紀初めにカスティーリャの羊毛は、フィレンツェの毛織物工業にとってもはや欠かせないものとなっていた。^{xvii}

15世紀末からカスティーリャ人の商人は、ポルトガルの胡椒や塩、ワイン、その大西洋上の島々の砂糖や大青にひかれてリスボンに進出した。ブルゴスの主な商人がここに代理商をおき、とりわけリスボンとアントウェルペンの間の香辛料取引に熱心であった。リスボンでは、アロ家とマルエンダ家の取引が傑出しており、さらにファン・デ・エスカランテ、ロペ・デ・オヨ、ペドロ・デ・カストロといった商人が記録に名をとどめている。1509年8月と1511年1月の間にブルゴス商人は763万4,635レアルの取引をリスボンで行ったが、これは同期間にリスボンで記録された取引総額の11.41%に相当し

^{xix}
た。

また、ブルゴス商人はイギリスでも15世紀末に積極的に取引を行うようになった。1480年代に入って、イギリスからカスティーリャに向けてえんじ染め毛織物などの高級毛織物の輸出が増加する傾向にあったなかで、1480年代の後半にカスティーリャ人の商人がその輸出全体の50%ないしはそれ以上を扱うに至っている。また1475年以降に、ツールーズではカストロ家、マルエ ندا家などのブルゴス商人の取引が活発になり、ツールーズからイギリスへの大青輸出が拡大した。その他、カスティーリャの鉄とアンダルシアのオリーブ油の輸出も1480年代に増加した。1494年に、カトリック両王はロンドンにも在外商館をおき、ロンドンとの貿易拡大を図った。15世紀末からロンドンで活躍したカスティーリャ人の商人は、カストロ家、サラマンカ家、ベルヌイ家のメンバーであった。^{xx}

一方、カスティーリャ南部のセビーリャでは、ジェノヴァ人の商人が揺るぎのない経済基盤を築いていた。ブルゴス商人がここに本格的に進出したのは15世紀末になってからで、この頃になってようやく、ブルゴスの有力家系は代理商をセビーリャに置くようになった。彼らはカナリア諸島のラゴメラ、ランサロテなどの島々の染料に関心を示していた。^{xxi}

i Joseph Pérez, *op. cit.*, pp. 40-47.

ii *Ibid.*, pp. 54-56, 大石一「帝国の基盤カスティーリャ王国の苦悩」『もう一つのスペイン史-中近世の国家と社会-』同朋舎出版, 1994年, 48-53頁。

iii Joseph Pérez, *op. cit.*, pp. 60-62, Luis Suárez Fernández y Juan de Mata Carriazo: *ibid.*, pp. 51-57.

iv Joseph Pérez, *op. cit.*, p. 60-62, 諸田實『フッガー家の時代』有斐閣, 1998年, 第3章, A. W. Lovett, *La España de los Primeros Habsburgos (1517-1598)*, Barcelona, 1989, pp. 15-16.

v Joseph Pérez, *op. cit.*, pp. 60-62.

vi Joseph Pérez, *op. cit.*, pp. 60-62, M. A. Ladero Quesada, *El siglo XV en Castilla. Fuentes de renta y política fiscal*, Barcelona, 1982, moneda y tasa de precios en 1462, pp. 134-139.

vii Manuel Basas Fernández: 《La función del Consulado de Burgos en el apogeo

- económico de Castilla», en: *La ciudad de Burgos. Actas del Congreso de Historia de Burgos*, Madrid, 1985, pp. 234-243, Manuel Basas Fernández, *El Consulado de Burgos en el siglo XVI*, Madrid, 1963, Robert Sidney Smith, *The Spanish Guild Merchant. A History of the Consulado, 1250-1700*, Durham, 1940, pp. 67-74, Carla Rahn Phillips: «Spanish Merchants and the Wool Trade in the Sixteenth Century», *Sixteenth Century Journal* 14 (1983), pp. 259-263, 266, 274-76, L. M. Bilbao and E. Fernández de Pinedo: «Wool exports, transhumance and land use in Castile in the sixteenth, seventeenth centuries», en: I. A. A. Thompson and Bartolomé Yun Casalilla (eds.), *The Castilian Crisis of the Seventeenth Century*, Cambridge, 1994, pp. 103-104.
- viii Hilario Casado Alonso: «Las colonias de mercaderes castellanos en Europa (siglos XIV-XVI)», en: *Castilla y Europa: comercio y mercaderes en los siglos XIV, XV y XVI*, Burgos, 1995, p. 28, 37.
- ix Casado Alonso: «Las colonias. . .», p. 29.
- x Phillips: «Spanish Merchants. . .», p. 276.
- xi モラ・デュ・ジュルダン (深沢克巳訳) 『ヨーロッパと海』平凡社, 1996年, 142頁。
- xii Miguel Rodríguez Llopis: «La Integración del reino de Murcia en el comercio europeo al fin de la Edad Media», en: *Castilla y Europa: comercio y mercaderes en los siglos XIV, XV y XVI*, Burgos, 1995, pp. 82-84, 90-91. Jacques Heers: «Commerce des basques en méditerranée au XV siècle», *Bulletin Hispanique*, Tomo 57, 1955, pp. 295-297.
- xiii Rodríguez Llopis: *Ibid.*, p. 101
- xiv Rodríguez Llopis: *Ibid.*, pp. 93-94.
- xv Rodríguez Llopis: *Ibid.*, pp. 103-104.
- xvi Rodríguez Llopis: *Ibid.*, p. 110.
- xvii Rodríguez Llopis, *Ibid.*, p. 96-97.
- xviii María del Carmen Carlé: *Ibid.*, p. 242, Casado Alonso: «Las colonias. . .», p. 46, 星野秀利 (斎藤寛海訳) 『中世後期フィレンツェ毛織物工業史』名古屋大学出版会, 1995年, 247-336頁。
- xix Casado Alonso: «Las colonias. . .», p. 24.
- xx Wendy R. Childs, *Anglo-Castilian trade in the later Middle Ages*, Manchester, 1978, pp. 106-120, Casado Alonso: «Las colonias. . .», p. 46.
- xxi Juan Manuel Bello León: «El reino de Sevilla en el comercio exterior castellano (siglos XIV-XV)», en: *Castilla y Europa: comercio y mercaderes en los siglos XIV, XV y XVI*, Burgos, 1995, pp. 69-70.

2. 北欧の商業都市におけるカスティーリャ商人

2.1. カスティーリャ人の在外居留民団

今日では、15、16世紀にカスティーリャ人が築いた居留民団（colonias y naciones）のシステムが、この時代におけるカスティーリャの商業発展を可能にしたメカニズムの一つであると見られている。カスティーリャ人の居留民団の組織は、イタリア人やドイツ人の居留民団の模倣であったと言われている。その居留民団に所属する人々はほとんどがカスティーリャと外国都市の間の商業にたずさわる商人と彼らがもたらした商品を現地で転売する商人であり、それだけに商人団体としての性格が濃厚である。この制度によってカスティーリャ人の商人は、外国商人との競争を有利に進めることができた。彼らは、各地の取引仲間や代理商、領事などから必要な情報を得ることができたし、また、居留民団に所属することで社会的な評価を手にすることができたようだ。ここからわかるのは、彼らの間では血縁者間および同職者間の関係がひじょうに緊密だったということである。さらに一般に兄弟信心会がこの居留民団と重なりあい、みずから選んだ修道会の援助を受けている。モラによると、こうした居留民間の結束はメリノ種の羊毛、ビスカヤの鉄、アンダルシアのオリーブ油、マサロンの明礬といったイベリア半島の生産物がもつ特殊性に対応していたのである。カスティーリャ人は、カスティーリャだけが供給できる戦略的な商品をたずさえて外地の市場を訪れたが、その際に居留民団における協力関係が現地で彼らの成功を可能にしたということだろう。だからと言って、居留民団の拘束がカスティーリャ人とイタリア人の国際的なネットワークの拡張を妨げることはなかった。前述の協力関係はいわば便宜的なものであり、これが必要でないところではラテン的な個人主義と冒険心がおおいに発揮されたのである。モラは、彼らの血縁ネットワークの展開とラテン的な個人主義がヨーロッパ実業界の形成とその凝集性という特徴の発生に大きく作用したと述べている。カスティーリャ商人の居留民団の繁栄期は、15世紀半ばから16世紀末までである。15世紀半ば以降にカスティーリャから北欧への羊毛輸出が拡大し、その

商業ルート沿いにカステイーリャ人の商人は商業と金融業の網の目を広げた
が、その際に居留民団のシステムが彼らの取引上の成功と安全を可能にしたの
である。ⁱⁱⁱ

15, 16 世紀にカステイーリャ人が各地で形成した居留民団の規模を見ると、
後述のようにブリュージュの居留民団が最大であり、16 世紀を通じ、これに
比肩する勢力を誇ったのはアントウェルペンの居留民団である。これに次ぐの
はナントとルーアンの居留民団であった。各地の都市の居留民団が領事職の設
置を認められた年は、ブリュージュでは 1428 年、ナントでは 1430 年、ルーア
ンでは 1450 年、バルセロナでは 1388 年、マジョルカでは 1399 年、ジェノ
ヴァでは 1421 年、ニサでは 1436 年、マルセイユでは 1438 年のことであっ
た。この他、正確な年代はわからないが、ロンドンやラロッシェル、フィレン
ツェ、ピサ、ナポリ、リスボン、ベネチアの居留民団にも領事が置かれた。^{iv}

2.2. ブリュージュの居留民団の発展

早くも 12 世紀にはカステイーリャ北部の商人は低地地方やフランスを訪れ
ていたようだが、彼らが外国の都市で継続的に取引するようになったのは 13
世紀に入ってからである。この 13 世紀には、海外の商業都市に定住したカス
テイーリャ商人の家系は少なく、フリーアス家とカストロヘリス家ぐらいたっ
た。また、いつごろカステイーリャ人の商人がフランドルに定住するようにな
ったのかは明らかでない。だが、1267 年以前に遡ることはたしかである。
この年にフランドル伯は外国人の間の係争を調停しているが、このときにカス
テイーリャ人が当事者だったのである。13 世紀末に、カステイーリャ人の商
人団体の代表者がフランドル伯と交渉を行った記録がある。1281—93 年の史
料からは、すでにこの時期にカステイーリャ人はブリュージュでドイツ・ハン
ザの商人と協力して取引を行い、塩漬け鯨などをカステイーリャに運んでいた
ことがわかる。^v

14 世紀に入ると、1336 年には、商人と海運業者からなるカステイーリャ人
の居留民団は、広範な免税特権をブリュージュ市から与えられた。さらに

1343年にフランドル伯は、「外国人商人がスペイン人から商品を買って国外に運び出すことができる」と定めた。すなわち、カスティーリャ人はフランドルにおいて、直接に他の外国商人と取引する自由を追認されたのである。加えてフランドル伯は、カスティーリャ人の通航と財産の安全も保障したが、カスティーリャ人は13世紀末からこれらの特権を与えられていたようだ。この1343年以降、カスティーリャ人の取引は日増しに活発になり、記録も多くなる。次いで1367年に、カスティーリャ人の船乗りたちは、昼夜を問わずスロイスからブリュージュまで船を曳航する特権を与えられた他、スロイスまたはフランドルの他の都市で無税で商船を修理できるようになった^{vi}。その後、14世紀半ばにおけるヨーロッパの人口危機によってカスティーリャ人の遠隔地間商業は一時的に停滞したが、まもなく回復の兆しを示し始めた。

こうして14世紀末以降、とりわけ1425—30年からカスティーリャ人の商業は再び盛んになった。この頃には、カスティーリャ北部からフランドルへの羊毛輸出の急成長が特筆される。カスティーリャの羊毛は、ガン、イープル、ブリュージュ、リールなどの毛織物工業都市で利用されるようになっていた。ブリュージュにおけるカスティーリャ人の居留民団は成長を続け、1414年にカスティーリャ人はフランシスコ会の修道院内でサンタ・クルス礼拝堂の使用が認められた^{vii}。また、カスティーリャのフアン2世（治世1406—54）の求めに応じて、1428年にフランドルのフィリップ賢公は、カスティーリャ国王ないしは国王の代理人がカスティーリャ人の居留民団の領事を1名任命する権利を認めた。つまり、このときに居留民団は商事裁判権を獲得したわけであるが、ブリュージュ在住のカスティーリャ人の商人たちは、王権の介入に抵抗し、国王が任じた領事ディエゴ・ロペス・デ・ラレドンダを拒絶した。このため1447年に、国王は領事の任命権を放棄した^{viii}。

その一方で、1441年4月にカスティーリャ人の商人は、カスティーリャ人だけでなく、ビスカヤ人も含めた単一の居留民団を組織することを決めて規約を制定するとともに、独自の領事を選出した。彼らはこの居留民団を「スペイン人の居留民団」(La Nación de España)と名づけ、サンタ・クルス礼拝堂を

独占的に使用しようとした。だが、ビスカヤ人たちはこれに反発して彼らの自治権を要求し、1455年には独自の居留民団の設立と領事の選出が認められた^{ix}。従って、この時からブリュージュにはカスティーリャ人（スペイン人）の居留民団とビスカヤ人の居留民団の2つが併存することになった。ブリュージュでは、イタリア人以外の南欧の居留民団は、15世紀末まではビスカヤ人、カスティーリャ人、カタルーニャ人およびアラゴン人の4つだったが、16世紀初頭からナバラ人の居留民団が加わった。いずれの居留民団も、独自の領事を持っていた^x。15世紀末になると、ブリュージュでカスティーリャ人の地位は揺るぎないものであり、1495年に彼らは、ブリュージュの市参事会に対してドイツ・ハンザの商人に次ぐ1万271リブラを貸し付けた^{xi}。

15世紀末にイタリア人などの外国人の商人がブリュージュを離れてアントウェルペンに移ったために、このときからカスティーリャの商人はブリュージュで「主役」の座を占めるに至り、その居留民団はブリュージュの市政を左右する力を持った。カスティーリャ人は居留地を営む特権を与えられ、1493—94年にランゲ・ヴィンケル通りに移り住んだ。のちにこの通りは「スペイン人通り」と呼ばれたのである。1493年から1503年にかけて、ここに「スペイン人館」(La casa de la nación de España)が建設された。スペイン人館には、いくつかの寝室、会議室、謁見室、書記室などが設けられ、その他、3棟の羊毛倉庫があった。16世紀初めには毎年1月25日と7月25日に3名の領事が居留民の候補者のなかからくじで選出された。領事はブルゴスの組合、現地の都市の市参事会などに対して、カスティーリャ人の居留民団を代表して交渉し、その利益をまもるとともに、居留民間の紛議を解決するための商事裁判権を握っていた。領事は商取引、航海、海上保険などの係争を迅速に裁いた。加えて、領事を補佐する評議員が6名選出され、その任期は6ヶ月であった。

ブリュージュにおける居留民団の規模を見ると、1411年にブリュージュ市はすべての外国人に特別税を課したが、このときに10人のカスティーリャ人が外国人全体の納税額の7%に当たる42リブラを納めている。1490年に59人のカスティーリャ人の商人がいたとの報告がある。そして時代は少し下る

が、1540年には78人が羊毛商人として記録されている。16世紀後半になると、1562年に56人、1566年に49人であり、その後1573年に47人に、1576年に39人に減少した^{xii}。

こうして、15世紀初めに創設された居留民団のシステムは、1560—70年代まで機能した。だが、1573年にスヘルデ河の河口域が反乱軍により封鎖されてから、カスティーリャ人の商業は困難に直面し、ブリュージュ市とその居留民団が保ってきた特権的な地位がゆらいだ。1580年代になると、カスティーリャの羊毛指定市場は転々とする。1580年に羊毛指定市場はブリュージュからサントメに移された。次いで、1587年と89年の間にリールが指定市場となったが、89年には再びブリュージュに戻された。だがこのときに、リールは羊毛を独占的に直接にルーアンから受け取る権利を保った。そして1602年、ブリュージュは羊毛を独占的に受け取る権利を最終的に失った^{xiii}。

ブリュージュで活躍したカスティーリャ人の家系としては、ガーリョ家、パルド家、サラマンカ家、マタンサ家、マルエンダ家、アランダ家、ナヘラ家などが知られている^{xiv}。商売上の拠点をブリュージュにおくカスティーリャ人は、ブルゴスの組合とブリュージュの居留民団を軸とするカスティーリャ人の商業システムに忠実だった。これとは異なり、15世紀末に活動拠点をアントウェルペンに移した者は、このシステムの枠から逸脱しがちで、外国人の商人と協力しながら取引を展開していたようである。

それでは、15世紀半ばにブリュージュで活躍したブルゴス商人、ディエゴ・アロンソ・デ・ブルゴスの活動を通じ、ブルゴスとブリュージュの居留民団の間で行われていた緊密な人的交流を確認することにしよう。1430年代の後半か1440年代の初めに、アロンソ・デ・ブルゴス家のゴンサロおよび彼の息子のローペとディエゴは、ブルゴスで商会を設立してナント、ラロッシュェル、フランドル諸都市との商業を行った。なかでもディエゴはフランスとフランドルの各港で代理商として活躍した。彼のフランドルでの地位は高く、1447年にブリュージュで起きた同郷人の紛議において仲裁役を務めている。だが、彼はブリュージュに定住していたのではない。海外でのカスティーリャ王室へ

の奉仕が認められ、1457年10月にエンリケ4世からブルゴスの市参事会員の筆頭に任命された。以後1460年代を通じ、彼はひんぱんにブルゴスに戻り、ブルゴス市の内外で繰り返し不動産を購入した。彼は生活の本拠をブルゴスにおくことを決めていたのだが、その一方、1467年にブリュージュでカスティーリャ人の居留民団の領事に選出された。ブルゴスの市参事会員の一人が、海を越えたブリュージュでカスティーリャ人の居留民団の領事職を兼務したのである。彼は1479年にブルゴスで亡くなり、同市のサン・キルセ修道院内の礼拝堂に埋葬された^{xv}。

2.3. アントウェルペンの居留民団

1480年代以降、ハプスブルク家の保護を受けたアントウェルペンがヨーロッパの遠隔地間商業の中心として急速に成長した。それとともに外国人の商人がアントウェルペンに移住する動きが強まり、1488年7月11日にハプスブルク家のマクシミリアン1世はカスティーリャ人をアントウェルペンに招聘した。実際の移住は89年以降に行われ、すでに1492年には、カスティーリャ人はアントウェルペンに定住しており、羊毛の取引も商事裁判所もここに移されていた。これに対応してブリュージュは、カスティーリャ人の居留民団が同市に戻るように様々な優遇措置を打ち出した。これが功を奏し、1494年1月になって、カスティーリャ人の領事はこの年の9月までにブリュージュに戻ることを約束したのである。だが、同年5月にブリュージュはカスティーリャの羊毛の専買権を放棄し、同時にフランドル産毛織物をカスティーリャ人の商館で売る権利も放棄した。それゆえに、15世紀末以降はアントウェルペン在住のカスティーリャ人もカスティーリャの羊毛を販売し、カスティーリャ向けに毛織物を購入することができるようになったのである。最終的に1494年10月に、カスティーリャ人の居留民団はアントウェルペンからブリュージュに戻った。ブリュージュは正式にカスティーリャの羊毛の指定市場となったのである。ところが、1510—12年には多くのカスティーリャ人の商人が再びアントウェルペンに移住した。アントウェルペンに出た商人の数はブリュージュに止

まった商人より多く、商取引高では5倍に達していたという^{xvi}。カスティーリャ人は、ここで取引されていたポルトガルの胡椒、ドイツの銅と銀、イギリスの毛織物などに関心を寄せていたからである。アントウェルペンに定住したカスティーリャ人の商人は16世紀を通じて独自の商事裁判権を獲得しようとしたが、ブリュージュの居留民団の抵抗にあって成功しなかった。これらの商人のなかには、ブリュージュから独立して自由な商取引を望む者が多かったようである。

こうして、アントウェルペンにおけるカスティーリャ人の居留民団の規模は15世紀末から1570年代まで大きく、1560年の調査では、61人の既婚の商人と38人の未婚の商人が確認されていた。彼らはブリュージュに届いた羊毛をアントウェルペンで売りさばいていた。また、同じ年に商人以外の職業にたずさわるカスティーリャ人について見ると、200家族がアントウェルペンに居住していた。ルドビコ・ギッチャルディーニによると、1567年にカスティーリャ人の居留民団は「すべての居留民団のなかでも最大規模に属する」ものだったようだ。さらに、1552—53年に作成された名簿によると、居留民団に属さない商人も含めるならば、約200人のスペイン人がアントウェルペンからイベリア半島に商品を輸出していた^{xvii}。アントウェルペンで活躍した商人としては、ロペス・ガリョ家、アロ家、サンタ・クルス家、ベルヌイ家、バリエ家などがある^{xviii}。富裕な商人のなかには金融業に手を出す者もあった。例えば、1510年5月にアントニオ・デ・バリエはアントウェルペンの市参事会に2万1,000リブラを年利11%で貸し付け、同年6月にはさらに1万5,900リブラを年利7.5%で貸し付けた^{xix}。

なお、カスティーリャ人の商人は西地中海でも、14世紀末からバレンシア、バルセロナ、マジョルカ、ジェノヴァに小さな居留民団を形成し、「カスティーリャ人の領事」を選任していた。だが、カトリック両王の時代には、これに代わってカスティーリャ人とアラゴン人を代表する「スペイン人の領事」が置かれるようになった。「スペイン人の領事」は国王によって任命された^{xx}。

2.4. アントウェルペンを拠点とするアロ兄弟の活動

16世紀初めになると、ブルゴス商人は代理商をリスボンに置くようになった。この時期にリスボンとアントウェルペンの間の取引で最も活躍したブルゴス商人はディエゴ・デ・アロとクリストーバル・デ・アロの兄弟である。彼らは、アントウェルペンを足場として兄弟の父親のクリストーバルとともにポルトガルとの貿易に参加した。また、彼らはスペイン王室が主導した新たな胡椒貿易ルートの開拓事業においても出資者として重要な役割を果たした。この兄弟がいつ頃からアントウェルペンやリスボンで取引を行うようになったかは明らかでない。だが、1490年にアントウェルペンのカスティーリャ人の商人たちは、ブリュージュの居留民団に送った書簡において、ディエゴ・デ・アロはアントウェルペンに居住する商人と記しており、1480年代には彼らがネーデルラントに進出していたことはほぼ確実である^{xxi}。以下、彼らの活動を垣間見る事にしよう。

弟のディエゴは、1505年までにはアントウェルペンの女性と結婚し、その市民権を得ていた。アントウェルペンの史料を通じてケレンベントは、彼がアントニオ・デ・バリエなどとともに行った投機的な不動産取引を紹介している^{xxii}。それだけでなくディエゴは、リスボンとアントウェルペンの間で大規模な商取引を行っていたのであり、本稿ではその一端を紹介することにしたい。彼は13世紀から15世紀までの地中海世界でよく知られていたコンメンダ契約をアントウェルペンで海運業者と結び、東方の物産を手に入れていた。コンメンダ契約においては、契約の当事者は荷受人＝機能資本家（comendatario）と出資者＝無機能資本家（comendante）であり、航海の後にえられた利益は当事者間で一定の割合で分配された。契約は一回の取引を対象に結ばれ、複数回の継続的な取引が対象にならなかったところに特徴がある^{xxiii}。コネツケは、カスティーリャ人が長期の商事会社を設けなかったと指摘しており、彼らの商業契約の形態が会社組織や商慣行に影響した可能性ある^{xxiv}。

例えば、1505年2月26日にディエゴは、ジュリアン号というカラベラ船の船長であるポーウェルス・コルネリソンと契約を結んでいる。それによると、

ポーウェルスの弟のクラウスとディエゴの代理商がディエゴ所有の小麦をジュリアン号でアントウェルペンからリスボンまで運び、現地で売却する。次いで代理商は小麦の販売代金でマデイラ産もしくはリスボン産の商品を船の返り荷としてそこで購入し、アントウェルペンではディエゴがこの商品を販売する。最終的に、この販売代金からリスボンでの小麦の販売代金を差し引き、得られた利益についてはディエゴとコルネリソン兄弟の間で折半するというものである。これは、商品の輸送・販売を海運業者に委託するという典型的な「旅のコンメンダ契約」である。だが、利益の折半という条件は、15世紀のバルセロナで一般的だった分配率よりも荷受人にとって有利である。バルセロナでは、14世紀末から東方貿易の利益率が低下し、荷受人の取り分が25%から16.7%に減った。アントウェルペンで荷受人の取り分が多かったのは、取引の利益率が高かったということだろうか。ディエゴはまた、他のカスティーリャ人やドイツ人の商人と協力して取引を行った。1507年10月23日には、ニコラス・デ・レヒテルテンおよびコンラット・イムホフとともにドイツ人とカスティーリャ人の商人グループを代表して公証人のもとに出頭し、委任状を作成した。委任状は、フランス人によって拿捕された商船とその積荷を取り戻すため、ディエゴの取引仲間のなかには、ウルリッヒ・フッガーやピエール・イムホフ、アントン・ウェルザーなどのドイツ商人が名を連ねている。さらに、1511年にディエゴの商船がフランス人に拿捕された際には、ブリュッセルの宮廷が介入する一幕があった^{xv}。

一方、兄のクリストーバル・デ・アロは、16世紀初めの探検航海の時代に忘れてはならない人物である。1505年にアロ家は代理商を12年間にわたりリスボンに置くようにとの要請をポルトガル国王から受け、アントウェルペンに住んでいたクリストーバルがこの役目を引きうけた。だがこの背景には、ポルトガル国王がネーデルラントにおける王室代理人をブリュージュからアントウェルペンに移し、これにともなって商人がリスボン以外から東インドへの航海に直接に乗りだすのを制限したことがある。このため、東インド貿易に関心のある商人はリスボンへの進出を余儀なくされたようだ。いずれにせよ、クリ

ストーバルはリスボンで東インドに関する情報を集める機会を得たことになる。7年後の1512年に、ポルトガル国王はクリストーバル・デ・アロとディエゴ・デ・ラス・コバルビアスに15年間にわたりドイツ人並みの広範な特権を与えた。クリストーバルは早くから取引に成功していたようで、1513年にリスボンの市参事会は、バルトロメオ・マルキオニ、ジョアン・アフアイタディおよびクリストーバル・デ・アロについて、リスボンで多額の利益を得ている人々と記録している^{xvi}。

この頃、クリストーバルはアントウェルペンの家族とともに取引を行い、また新大陸東岸を南に航海することによりアジアの香料諸島に到達しようとしていた。1512年にポルトガル国王の寵臣であるヌノ・マヌエルとクリストーバルは、ラプラタ地方北部に航海し、帰りにはマデイラ島に寄って基地を建設するという計画を練っていた。詳細は不明だが、たぶんこの年にクリストーバルはポルトガル人の航海者を派遣するだけでなく、自らもブラジルに渡ったらしい。そして1515年10月に、ファン・ディアス・デ・ソリスは、クリストーバルの計画の下でラプラタ地方に航海した。これらの航海が下地になったのであろう。1515年にディエゴとクリストーバルの兄弟は、15—16隻の商船を西アフリカのギネア湾に送り、ブラジルとシエラレオネの間で奴隷貿易を行おうとした。だが、ポルトガル人のエステバン・ユサルテがこの船団を攻撃し7隻を破壊した。アロ兄弟の損失は1万6,000ドゥカードに上り、さらに訴訟費用に2,000ドゥカードを充てねばならなかった。この事件が影響したのか、あるいは国王フェルナンドの死とカルロス1世（治世1516—1556）の即位がクリストーバルの転機となったのか、1517年頃にクリストーバルはリスボンを離れた。リスボンでは、彼の従兄弟のニコラス・デ・アロが代理商の職務を引き継いだ^{xvii}。

カスティーリャに戻ったクリストーバルは、その後、スペインの王室も関わったマゼランの世界周航事業（1519—22年）に2,000ドゥカードを投資した。1523年からクリストーバルは、ラ・コルーニャでフッガー家の代理商であり、またラ・コルーニャの「モルッカ通商院」（1522—29年）の王室代理官

となっていた。これはポルトガルで得た情報をうまくスペイン王室に売り込むことができたためであろう。彼は1525年のガルシア・デ・ロアイサの航海の組織にも関わった。1523年3月、カルロス1世は書状をリユーベックとダンツイヒの両都市に送ったが、そのなかで彼はヤーコプ・フッガーとクリストーバルが国王の委託を受けて銅、マスト、タール、ピッチ、索具などの商品を両市で買い付け、8隻の船にそれらの商品を積んでラ・コルーニャに輸送する計画に言及している。これはロアイサの航海に参加する船を艤装するためであった。クリストーバルはロアイサの航海に70万3,050マラベディを出資し、彼の息子のファン・ロペス・デ・アロと弟のディエゴも出資した。1527年のディエゴ・ガルシア・デ・モゲルの航海にもアロ家は出資した。ガルシアの航海の費用は70万2,811マラベディで、王室が19万4,000マラベディを出資し、クリストーバル以外では、商人のアロンソ・デ・サラマンカ、ラ・コルーニャの市参事会員であるベルトラン・サマノ、王室の役人であるルイ・バサンテが出資した^{xvii}。加えてこの1520年代にクリストーバルは、モルッカ通商院の王室代理人として王室による航海資金の調達に貢献している。1524年にフーロ（公債）の売却を通じて2万5,000ドゥカードの資金調達に貢献し、また1527年にも同額の資金調達を行った。フーロの買い手はブルゴスやトレドの富裕な市民であった^{xviii}。

i. Casado Alonso: 《Las colonias. . .》, pp. 15-16, 52., 自治権を持たずに十分に組織されていない居留民団が colonia, 商事裁判権を管轄する領事などの自治組織をそなえた居留民団が nación である。

ii モラ, 前掲書, 135, 141頁。

iii Casado Alonso: 《Las colonias. . .》, p. 19, モラ, 前掲書, 142-145頁。

iv Casado Alonso: 《Las colonias. . .》, p. 18.

v Carlé: *Ibid.*, p. 249.

vi Carlé: *Ibid.*, pp. 251-52, Casado Alonso: 《Las colonias. . .》, p. 18.

vii Carlé: *Ibid.*, p. 253.

viii Carlé: *Ibid.*, p. 251-52, Casado Alonso: 《Las colonias. . .》, p. 21,

ix Carlé: *Ibid.*, p. 257, Basas Fernández, *op.cit.*, pp. 29-36.

x モラ, 前掲書, 131頁。

- xi Carlé: *Ibid.*, p. 260.
- xii Casado Alonso: 《Las colonias. . .》, p. 31.
- xiii Casado Alonso: 《Las colonias. . .》, p. 53-54.
- xiv Casado Alonso: 《Las colonias. . .》, p. 46.
- xv Hilario Casado Alonso: 《Una familia de la oligarquía burgalesa del siglo XV: los Alonso de Burgos-Maluenda》, en: *La ciudad de Burgos. Actas del Congreso de Historia de Burgos*, Madrid, 1985, pp. 147-148.
- xvi Carlé: *Ibid.*, pp. 258-259, 諸田實, 前掲書, 189-200頁。アントウエルペンにおけるポルトガル人の居留民団については, 中沢勝三「アントウエルペンのポルトガル人-イベリア商人コロニーとその活動-」『地中海地域における集落形成の諸問題』一橋大学地中海研究会, 1980年を参照。
- xvii Casado Alonso: 《Las colonias. . .》, p. 32.
- xviii Casado Alonso: 《Las colonias. . .》, p. 46, Richard Ehrenberg: *Das Zeitalter der Fugger*, Jena, 1922, pp. 356-363, 諸田實, 前掲書, 150-152頁。
- xix Ehrenberg: *op.cit.*, pp. 356-357.
- xx Elisa Ferreira Priegue: 《Cónsules de castellanos y cónsules de españoles en el Mediterráneo bajomedieval》, en: *Castilla y Europa: comercio y mercaderes en los siglos XIV, XV y XVI*, Burgos, 1995, pp. 191-222.
- xxi Hermann Kellenbenz, Die Brüder Diego und Cristóbal de Haro, in: *Portugiesische Forschungen der Görresgesellschaft, Erste Reihe, Aufsätze zur Portugiesischen Kulturgeschichte 14*, 1976/1977, pp. 303-305, 《Cristóbal de Haro: Nuevos documentos para su historia》, en: *La ciudad de Burgos. Actas del Congreso de Historia de Burgos*, Madrid, 1985, pp. 401-402, 諸田實, 前掲書, 87-101頁。
- xxii Kellenbenz, Die Brüder Diego. . . . , pp. 308-315.
- xxiii José María Modurell Marimón y Ariadio García Sanz, *Comandas comerciales barcelonesas de la Baja Edad Media*, Barcelona, 1973, pp. 62-125. Olivia Remie Constable, *Comercio y comerciantes en la España Musulmana. La reordenación comercial de la Península Ibérica del 900 al 1500*, Barcelona, 1997, pp. 63-94.
- xxiv Richard Konetzke: 《Die spanischen Verhaltensweisen zum Handel als Voraussetzung für das Vordringen der ausländischen Kaufleute in Spanien》, in: *Kölner Köllquien zur Internationalen sozial und Wirtschaftsgeschichte*, herausgegeben von Herman Kellenbenz Band 1, 1970, pp. 4-14, 諸田實, 前掲書, 314-322頁。
- xxv Renée Doehard (ed.), *Études Anversoises. Documents sur le commerce international a Anvers, 1488-1514*, Paris, 1963, 3 vols, pp. 175, 192の公証人記録より。
- xxvi Kellenbenz, Die Brüder Diego. . . . , p. 305.
- xxvii Kellenbenz, 《Cristóbal de Haro: . . .》, p. 403

xxviii Kellenbenz, 《Cristóbal de Haro : . . . 》, p. 403 - 404, Kellenbenz, Die Brüder Diego. . . . , p.303 - 304..

xxix Kellenbenz, 《Cristóbal de Haro : . . . 》, p. 405 - 408.

おわりに

これまで見てきたように、15世紀半ばから16世紀半ばにかけて、カスティーリャ北部の商人はネーデルランドへの羊毛輸出を軸に活発な商業活動を展開した。特にカトリック両王の時代にブルゴスの商人は、両王がカスティーリャ人の外国貿易を支援したこともあって、その活動領域を着実に広げていた。ブリュージュやアントウェルペン、ナントなどの都市で彼らはその名を記録に残している。1492年のユダヤ人追放や1502年のモーロ人追放にもかかわらず、17世紀初めの献策者（アルビトゥリスタ）をはじめとする後代の識者が、カトリック両王の治世を理想視するのはこのためである。この時代に商人たちはブルゴスの組合を通じて王権とのつながりを強めたのであるが、つづくハプスブルク家の「スペイン帝国」の時代に彼らは同じように王権の保護と支援を受けることができたのであろうか。16世紀前半に見られた、ジェノヴァ人、フランドル人、ドイツ人などのカスティーリャへの進出ぶりは、彼らが十分な保護を受けられなかったことを示唆していると思われる。カスティーリャ人は外国人商人との競争に巻き込まれて「後発」の実業家としての弱点をさらけだしたのであろう。そうしているうちに、16世紀後半になって羊毛輸出のシステムが崩れ去った。この時期には、かなりの数のカスティーリャ人が商業から手を引いて、北欧の都市で定住・帰化している。当時のカスティーリャはヨーロッパの西端に位置する辺境の国として異教徒の国々と対峙していたのであり、北のキリスト教世界とは何よりもこの羊毛輸出ルートを通じて経済的に結ばれていた。このルートが北欧のプロテスタント勢力により寸断されたときに、あらたにカスティーリャ南部とジェノヴァを結ぶ西地中海の商業ルートがスペイン帝国の大動脈となった。この急激な変化をもたらしたのは、王室の政治的な決断だったのかもしれない。だが、西地中海はジェノヴァ人の独壇場

で、カスティーリャ人はこれにうまく参画できなかつたⁱ。その後のカスティーリャ人が、商業活動において受動的になったことは疑いないところである。帝国の商業的な中心軸からはずれたカスティーリャ人にとっては、厳しい条件のもとで経済的な競争を本国で繰り広げるよりは新大陸植民地の支配・経営のほうが魅力的に映ったのではないだろうか。

- i リングローズは、地理的に統一されていなかった当時のスペイン帝国においては政治と商業の制度がもっとも強力な統一要素であったと指摘し、このときの変化を重視している。David R. Ringrose, *Imperio y península: ensayos sobre historia-económica de España (siglos XVI—XIX)*, Madrid, 1987, 第1章および第3章を参照。